

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 9 日現在

機関番号：32808

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530882

研究課題名（和文） 保育における子ども同士の同僚性の形成のためのカリキュラム構築

研究課題名（英文） Curriculum construction for the formation of collegiality among children in ECEC

研究代表者 無藤 隆 (MUTO TAKASHI)

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号：40111562

研究成果の概要（和文）：本研究は幼児の子ども同士の、共同の目的を志向し互いに協同し合う「同僚性」の関係を検討した。「協同的な学び」では、目的・目標の設定と活動の展開に応じたその変更の過程における知覚・動作・言葉の協同の仕方を同定した。子どものクラスでの発表活動、運動遊び、製作活動において、年齢とともに目的志向が増し、計画やルールやスキルを生かすことが出来ていた。5 歳児を中心に同僚性を学びの芽生えとしてそのカリキュラムの原則を提言した。

研究成果の概要（英文）：This research examined the relationships of collegiality among young children to form their cooperation orienting toward common objectives. In 'collaborative learning activity,' we identified 3 types of cooperative acts, i.e., perceptual, motor, and verbal ones, in the process of dynamic inter-transformation of objective-goal setting and progression of activity. In the show-and-tell activity, motor play, and art construction activity, children were found to increase goal-orientation with age to incorporate plans, goals and skills into their activities. Lastly, we presented principles of the curriculum for collegiality as emergent learning especially around 5-year-old levels.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
22 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
23 年度	800,000	240,000	1,040,000
24 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：幼児教育・保育

1. 研究開始当初の背景

本研究は、幼児の子ども同士の「同僚性」を、互いの共通の目的やルール等の、個別の人間関係の維持・愛情を超えたところを目指す活動を行うための機能的な子ども同士の人間関係として定義し、親密性と呼ぶ人間関係の親しみを表す関係と対比させている。この子ども同士の同僚性への注目は本研究で始めて提唱するものである。

研究代表者はこれまで既に、学びの芽生えや気持ちの調整を絡めて、幼児の保育における「協同的な学び」の活動に特に注目して、3歳、4歳、5歳の各々の協同性の特徴を観察を通して取り出すという予備的な検討を行っている。そこから、親しい人間関係でなくても、一緒に協力することはあり得ること、また特に5歳くらいになると、親密性と区別されて、協同的に互いに話し合ったり、工夫し合ったりすることが出てくることを見出した。そこから本研究の「同僚性」の関係を正面切って取り上げるべきことと、協同的な学びと命名されるようなグループの共通の目的を目指す活動とともに、それ以外にも、他の保育活動において、同様の「同僚性」の見られることがあるのではないかと考えるに至った。

2. 研究の目的

「同僚性」と本研究で呼ぶものについて、幼児の活動において、共通の目的やルールを志向すること、遊びの活動自体について遂行のための工夫をすること、スキルの向上を目指すことなどの観点から一緒になっている相手やグループと協力したり、上手な子どもの模倣をする等の姿を検討する。

第一は、「同僚性」が見られる活動をいくつか取り出し、継続して観察することを通して、「同僚性」が各々の活動の特質の中でどのように現れてくるかを3

歳から5歳において記述することである。4つほどの場面を想定する。協同的な学びの活動、クラスでの発表の場面、スキルを要する製作の場面、ルールのある運動遊び、等である。とりわけ5歳の年長児において展開し、発展するのかを明らかにする。第二は、「同僚性」を指導する保育者の働き掛けや支援の仕方を取り出すことである。第三は、「同僚性」を育てる保育カリキュラムとして定式化することである。

3. 研究の方法

本研究では、3年間掛けて幼稚園の3歳児から5歳児まで観察を行う。各研究者が、幼児の子ども同士の「同僚性」の発揮されるであろう代表的場面として、協同的な学びの活動、運動遊び、制作活動、発表場面、その他の集団的な活動について分担して、ビデオや録音、メモ等により観察を行う。そこから年齢と場面毎の「同僚性」の様子を記述し、また保育者の支援のあり方の原則を抽出し、3年間の指導のカリキュラムを構築する。

一つは協同的な学びの活動の観察である。その活動が具体的な形となる4歳と5歳に焦点を当てて、一つは5歳の単元に相当する時間の連続的な記録を取ったものを本研究の観点から分析する。また同様に、4歳という協同性が形として成り立つ時期に注目して、クラスの日々の観察記録を1年間継続して記録したものを分析する。

第二は運動遊びの観察である。ボール遊び、マット遊び、多様な動きを経験する遊びからなる「運動遊びプログラム」を保育園6園の4・5歳児クラスで実施、保育場面の観察とヒアリングについて、1~2か月に1度観察し、担任保育者にヒアリングを実施する。保育活動への取り組み姿勢の質問紙調査をする。

第三は制作活動場面の観察である。例えば、道具を使うスキルが重要な場面などをとらえて、そこで保育者の指導と共に子ども同士の「同僚性」としての関係のあり方を観察する。私立 A 幼稚園、公立 B 幼稚園の 4 歳児クラスについて観察した。

第四は発表場面の観察である。ある幼稚園において、3 歳児クラス・4 歳児クラス・5 歳児クラスそれぞれ 1 クラスずつを対象に、観察調査と教師への聞き取りを行った。特に、一日の遊びの振り返りや遊びで生じた問題を相談しあう発表場面について、ビデオレコーダによるデータ収集を行った。

4. 研究成果

(1) 協同的な学びの活動について、5 歳児の幼稚園の祭りに向けての活動をビデオ観察した記録から、協同的な活動を始めから終わりまで観察することで 7 つほどの活動過程を取り出せた。すなわち、子どもからの目的の設定、設計図の作成、設計図の具体化、製作と目標の往復、係（分担）表の作成、メインの発表、反省などの一連の過程と、そこでの協同活動を知覚的・動作的・言語的という三つの協同に分けてとらえた。さらに、その「3 つの協同」と「学び」との関係性を記述した。この「3 つの協同」が「学び」となるところで特に要となったところは特に、目的・目標の設定と、設計図作成の時、教師の指導・援助で子どもの中に友達の動きや周りの様子を見て知る「知覚的な協同」が生まれ、次第に友達と一緒に体を動かす「動作的な協同」が生まれてきた点であった。

なお、5 歳児の前段階として 4 歳児について一つのクラスの 1 年間にわたる協同的な関係の成立について検討している。それは利根川・無藤「幼稚園の 1 クラスにおける 4 歳児の仲間関係進展の事例的検討」

(乳幼児教育学研究 2011) 所載の論文に述べた。本格的な協同の学びの活動が成立する前の時期に、仲間であることと協同する関係が成り立つこととさらに子ども自身の自律の過程の絡み合いがあることを示した。

(2) 発表場面を分析し、そこでの協同のあり方としての同僚性の成立を年齢毎に記述し整理した。3 歳児クラスでは、当初個々ばらばらであった子どもたちを、ひとまとまりの集団の形になるよう、教師が集合の際の環境構成を工夫し、徐々にクラス単位での活動が可能になっていった。年度の後半になり発表ができるようになると、発表順や発表の仕方などを教師がリードしながら、時に言葉を補いながら、話し合う形ができはじめていった。4 歳児クラスでは、発表された遊びや問題のあった場面などについて、実際に数名で実演してみたり、クラスみんなでやってみたりするよう教師がリードし、話し合う活動につながっていった。5 歳児クラスでは、具体的な物を媒介にしながらも、言葉でのやり取りが中心になっていき、遊びの内容や進め方などについて子ども同士で意見を出し合うような場面も見られるようになっていった。発表場面のデータからは、幼児の同僚性を形成していく上で、まずはクラスという集団に子どもたちが馴染み、そこで具体的な活動を共有しながら、やがて互いの意見の交換という段階へと進んでいくことが示唆された。

(3) 運動遊びの検討について。プログラムに取り組むことによって、仲間関係に変化がみられた。運動遊びプログラムを実践した子どもたちは、自分の活動に集中して取り組んでいるだけでなく、他の子どもの様子や状態をよく見て意識しながら遊んで

いた。ペアで行うマット遊びでは、お互いに相手のやりやすいように位置を調整してマットから落ちないようにする行動が自発的に見られた。また、おにごっこ遊びでは、作戦を立てたり、つかまった子どもたちに大きな声をかけて助け合ったりする様子が見られた。また、同じ遊びをクラスで行うことで、これまで身体を動かさず遊びに取り組まなかった子どもも積極的に遊びに参加し楽しむ姿が見られた。それまでは表現されなかった側面にその子ども自身も仲間も気づき、一緒に遊ぶ仲間関係が変わったり、ルールを共有して多人数で遊ぶようになった。運動遊びに取り組むことにより、自信をもって仲間と関わり、認め合い協力することができるようになった。担任保育者のヒアリングから、子ども自身の成長がみられ、仲間を認め合ったり、協力的になったり、子どもたち自身でルールを作り出すなどの「同僚性」の行動がみられた。ルールを守って遊ぶ方が楽しく遊ぶことができるという経験を通して、自分たちでルールを守ったり、守ることができるルールを作ったりするようになった。みんなで遊ぶという意識がみられるようになった。

(4) 製作活動場面における保育者の援助のあり方を「同僚性」の芽生えとの関連から検討する。なお、本研究は、砂上が指導した轟(「製作活動における保育者の援助ー子ども同士のかかわり促す保育者の役割ー」千葉大学教育学部幼稚園教員養成課程平成 22 年度卒業論文)の内容に砂上が新たに加筆し考察を加えたものである。

製作活動における子ども同士のかかわりを促す保育者の援助について分析した。A 幼稚園・B 幼稚園ともに「人間関係」の方向性の援助で最も多かったのが「仲介」で、2 園で合計 56 回(「人間関係」の 52%)

であった。【事例 1】のように、他児の活動を伝えたり、他児の作品を紹介したりするなど、子ども同士を「仲介」することで、子どもは様々な表現に触れてイメージを深めたり、他児と表現の楽しさを共有したりすることができる。保育者は、作品というモノを媒介として、子どもが相互の関係を深められるような働きかけを行っているといえる。

B 幼稚園の「人間関係」の方向性の援助では「仲介」43 回(50%)、「コミュニケーション」11 回(12%)に続き、「提案」9 回(11%)が多く、誰かに作ってあげることや子ども同士で教え合うことに対する提案が多く見られた。事例 2 では、保育者が未就園児に「作ってあげてもいいね」と「提案」したことで、製作活動が始まり、子ども同士のかかわりが生まれている。子どもの表現は、受け止めてくれる他者の存在によって励まされ、支えられることから、製作したものを喜び、楽しんでくれる未就園児の存在が、子どもの意欲を高めたといえる。したがって、子どもの主体的な製作活動と子ども達の作品を他者に向けてひらき、子ども同士の関係をつなげる「人間関係」に対する援助は、密接に結びついているといえる。また、事例 1・2 のような直接的な援助以外にも、観察事例からは、材料の提示や見本の設定などの環境構成や、保育者自身が製作するモデルとなるなどの間接的な援助もまた、子ども同士のかかわりを促すことが明らかとなった。

以上から、製作活動は具体的な作業を伴い、材料や作品などのモノを媒介とすることから、子ども同士が共通の対象に関心を持ったり、それを見合ったり、同じ物とともに作ったりと、「同僚性」を構成する要素を含むものである。その「同僚性」の要素を保育者が個別具体的な活動場面において多様に援助することによって引き出

し、支えることにより、製作活動は子どもの同僚性を育む機会となっているといえる。

(5)5 歳児を中心としたカリキュラムの原則の構築を行った。詳細は、無藤「幼児教育から小学校教育への接続とは」(「子ども学、第1号」萌文書林 2013) 所載の論文で述べた。そこでは幼児教育とは何かということの上で、小学校教育への接続を展望し、その中で目的を志向することとそれに向けて自己調整を行うことを要とし、それが本研究でいう協同性や同僚性の育ちとなるということなのである。すなわち、以下の原則が挙げられる。1. 幼児教育の原理は遊びにおける学びの芽生えにある。2. 学びの芽生えとしての興味を育てる。3. 学びの芽生えとしての自己調整力を育てる。4. 学びの芽生えとしての気づきと伝え合いを育てる。5. 今の学びとイメージの学びが重なる。6. 今の学びと思い出の学びが重なる。7. 小学校の授業とは自覚的な学びを可能にする。

その上で、幼児期の学びの芽生えにおいて進めるべきことを整理した。幼児期の学びのあり方を感覚的・身体的な活動に求めることができる。小学校における学びのあり方は言葉による自覚的な学習活動に求めることができる。そこで、幼児期の感覚的・身体的な学びにおいて、それをたっぷりを行う中で、自覚や言葉への芽生えを促し、支えることが必要であろう。

以上で論じてきた自覚的な学びとそこに至る学びの芽生えを育てるものが目的志向性や協同性また自己調整過程であり、それらが本研究で解明しようとしてきた子ども同士の同僚性の中核であり、その育成が幼児教育をまさに教育たらしめることなのだと結論したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

無藤隆、子どもの成長発達をめぐる諸問題(上)、家庭裁判月報、査読無、65.3、2013、

1-50

吉永早苗・無藤隆、育児における「語りかけ」、「歌いかけ」の大切さー養育者・保育者と乳幼児間の音声相互作用の視点からー、思春期青年期精神医学 JSAP、査読有、21(2)、2012、110-124

松寄洋子、石沢順子、運動遊びプログラムの実践／子どもの動きと活動量に関する調査／子どもの意欲などの心情に関する研究、中野区幼児研究センター平成 23 年(

2012)年度調査研究報告書、査読無、2012、62-62

無藤隆、進化発達心理学とは、臨床精神医学、査読無、140(6)、2011、791-796

利根川彰博・無藤隆、幼稚園の1クラスにおける4歳児の仲間関係進展の事例的検討ー社会的能力と仲間関係の重なりとしての3つの発達ラインー、乳幼児教育研究、査読有、20、2011、1-11

松寄洋子・無藤隆、幼児の運動遊びに関する研究ー運動遊びの種類による運動スキルの向上への影響の違いー、乳幼児教育研究、査読有、20、2011、81-93

砂上史子、論説：遊びのなかで育まれる思考力の芽生え、幼稚園じほう、査読無、39(2)、2011、12-18

岩沢順子・佐々木玲子・松寄洋子・吉武裕、保育園に通う幼児の日常身体活動量、東京純心女子大学紀要、査読有、15、2011、21-28

松寄洋子・吉永早苗・岡本拓子・無藤隆・新開よしみ、保育現場の音環境に関する意識の構成要素と関連要因、埼玉学園大学紀要、査読無、10、199-209、2010

無藤隆、カウンセリングにおける広い意味での証拠の活用の仕方、日本カウンセリング学会 43、2010

[学会発表] (計 8 件)

砂上史子、幼稚園の葛藤場面における子どもの「揺れ(揺らぎ)」と保育者のかかわり、日本発達心理学会第 24 回大会自主シンポジウム「発達心理学における感情論的転回(Affective Turn)、2013.3.15、明治学院大学

松寄洋子、幼児の身体能力と日常生活での取り組み姿勢との関連、日本子ども社会学会第 19 回大会、2012.6.30、國學院

大学
松寄洋子・岩沢順子・無藤隆・横尾澄子・高木基行、幼児の運動遊びに関する研究－遊びや生活の取り組みに及ぼす影響－、日本保育学会第65回大会、2012.5.5、東京家政大学

岸野麻衣、幼稚園における協同に向けた話し合いの構造－個をつなぎ「みんな」をつくる過程の分析－、日本発達心理学会第23回大会、2012.3.9、名古屋国際会議場

岸野麻衣、幼稚園における協同的な活動に向けた遊びの共有と相談－クラス単位での話し合い場面の分析－、日本発達心理学会、2012.3.25、東京学芸大学

松寄洋子・無藤隆、幼児の運動遊びに関する研究(1)－幼児の運動遊びの種類による運動発達への影響の違い－、日本発達心理学会、2012.3.25、東京学芸大学
岩沢順子・佐々木玲子・松寄洋子・吉武裕、保育園児における身体活動量－歩数および活動強度による検討－、2011.3.13、早稲田大学

砂上史子、記録から子ども理解につなげる－“空間経過記録”式フィールドノートから－、子どもと保育実践研究夏期全国大会(子どもと保育総合研究所)、2010.8.10、東京家政大学

[図書] (計12件)

岸野麻衣、日本発達心理学会編/無藤隆・長崎勤責任編集、新曜社、発達科学ハンドブック6発達と支援、(第11章 学校教育の発達の基礎と学習としての育ち)、2012、111-120,362

無藤隆、日本発達心理学会編/無藤隆・長崎勤責任編集、新曜社、発達科学ハンドブック6発達と支援、(序章 発達心理学の展望と発達支援の位置づけ 1、第1章 現代社会の中の発達心理学の役割)、2012、1-6、8-21,362

無藤隆、フレーベル館、保育の学校Ⅰ 保育の基本と学び編、2011、133

無藤隆、フレーベル館、保育の学校Ⅱ 5領域編、2011、135

無藤隆、フレーベル館、保育の学校Ⅲ 5つの今日的課題編、2011、135

無藤隆・子安増生編著、東京大学出版会、発達心理学Ⅰ、2011、388

無藤隆他14名、株式会社ベネッセコーポレーション、幼児の生活アンケート報告書(国内調査)乳幼児をもつ保護者を対象に、2011、12-14,166

無藤隆他23名、ミネルヴァ書房、臨床発達心理学・理論と実践①臨床発達心理学の基礎、2011、237

無藤隆他19名、ミネルヴァ書房、臨床発

達心理学・理論と実践②育児のなかでの臨床発達支援、2011、
井上美智子・無藤隆他6名、北大路書房、むすんでみよう子どもと自然－保育現場での環境教育実践ガイド、2010、147
無藤隆他35名、フレーベル館、THE保育101の提言vol3、2010、225
無藤隆監修・指導、株式会社日本標準、人とのかかわり方を育てるスキルあそび45、2010、135

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

無藤 隆 (MUTO TAKASHI)

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号：40111562

(2) 研究分担者

砂上 史子 (SUNAGAMI FUMIKO)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：60333704

松寄 洋子 (MATSUZAKI YOUKO)

埼玉学園大学・人間学部・教授

研究者番号：90331511

岸野 麻衣 (KISHINO MAI)

福井大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：80452126